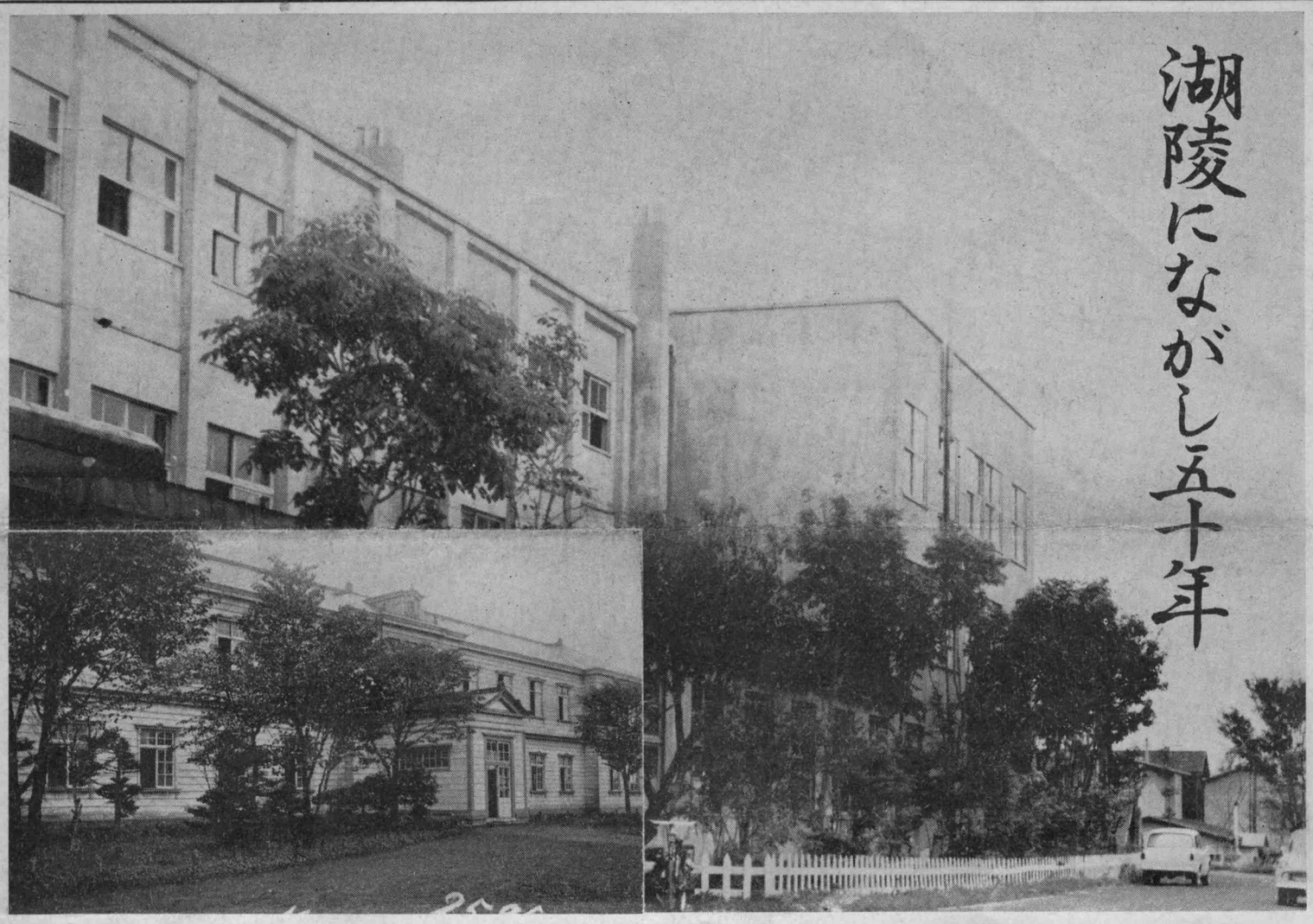
湖陵タイムス

発行所
釧路湖陵高校
生徒会新聞局
北海道釧路市
富士見町七一番地

五十周年記念特集号



本校半世紀の歩みを顧みて

学校長　中野一雄

現在の生徒諸君は十七、八才の若い人たちであるだけに、五十年の歩みといつても所謂雲を掴むような思いがするであろう。又我々は一面現在の発展に驚くけれども他面現在に至るまでの過程を看破するか、過少評価する事が多い。本校が現在あるはもとより五十年の歴史の結果であるが、ここにその概要を述べ以つてこの度の記念会典の意義を考えて見よう。

本校は大正二年四月、一学級定員五十名の募集で発足している。

現在の同窓会長さんや先日講演された、八代斌助先生、その他十数名の方が今尚健在である。それから終戦までの二十三年間に定員は五学級二五〇名募集の規模になつている。その当時は五年制であつたので、生徒総数は大体現在と同じであつた。戦後学制改革で三年制の新制高校となり、校名も北海道庁立釧路中学校から北海道立釧路高等学校となり、昭和二十五年北海道釧路湖陵高等学校となつた。この時初めて学区制をしき、男女共学となつた。これ以来それまでバンカラで通つていた本校に上品さが加わつて来て今の様な学校になつていつた。さてこの五十年間の本校の最大の不幸は昭和二十八年二月二十二日の学校火災であつた。焼けた旧校舎は現在のグランド全体を占める程大規模であつた。現在の校舎の建つている所は、グランドで周辺は草茫々であつたらしい。旧校舎は特別教室や図書館は全道に誇る程であつた。これ等が一朝にして烏有に帰したのだから当時の先生方や生徒諸君の辛酸の程も偲ばる。今も尚この日を本校の火災記念日として心に銘記する所以である。当時の状況からして復興は容易な事ではなかつたが、関係者全員が総力を結集し財政窮迫の中にあつて短期日の間によく現在の如きつぱな校舎及び内容を整備されたその努力に深意を表する。更にこの度五十周年を記念してPTA、同窓会其他地域社会の有志が広い瀟洒な図書館を附加された事は感謝に堪えない。

以上のような先輩の努力により本校は地域社会高等普通教育の殿堂として相応しい教育の成果を挙げてきた。即本校の教育目標にある。「明かるい希望に充ちて、堅実で進取的な人格」、「正義を愛し、正しい道徳的判断で良心的に行動する人格」、「相互協調の精神に基き郷土の文化、経済の発達をはかる人格」が形成されてきた。現在の私達はこの先輩の遺訓をうけつぎ、更に後輩に伝うべき責務を有する。今日の五十周年記念式典の意義をよく把握して諸君自らの学校祭典の行事に積極的に参加してほしい。

「改革」これは創立五十周年記念第十二回湖陵祭のテーマです。

"改革"

生徒会長　寺井徹

このテーマは「過去の古い習慣を生徒自身の手で改め、より身近なものとして皆で守ろう。又そのように改革することによつて生徒会活動全体を盛りあげていき、しいては湖陵の発展のために全力を尽くす」という湖陵魂のあらわれなのです。

「改革」というテーマをいかに取り入れるかということは非常に困難なことであると思います。

しかし困難であればあるだけ、又やり甲斐もありましよう。

ふりかえつて本校の歴史を見てみますと、一口に五十年といつても大正二年創立以来、実に半世紀もの間、八千からなる釧中、湖陵生を送りだし、道東の基礎を否、日本の基礎をきづいてきたのです。多くの先輩や父兄の方々の援助により、このようにりつぱな五十周年記念湖陵祭を行える事は、本当にうれしく又私たちの一生の想い出となることでしよう。

そしてこの改革というテーマをもつて五十周年記念湖陵祭を迎えた湖陵がより一層前進することをねがつてやみません。

寄　湖陵五十年

湖陵同窓会長　中川久平

湖陵多俊秀
英志意誰宣
人世流荒怠
学風与歳鮮

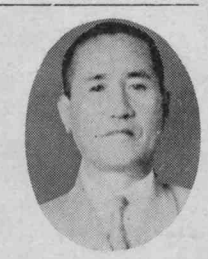
此ノ詩ハ
湖陵五十年ニ寄ス
湖陵俊秀多シ
英志意ニ誰カ宣ゲン
人世荒怠ニ流ルルモ
学風歳ト与ニ鮮ル
ト読ムノデス

母校、湖陵ノ創立五十周年ヲ迎ヘ往時ヲ顧ミ感慨無量ナルモノガアリマス、言ヒタイコト書キタイコトハ数限リナクハアリマスガ胸ガツカエテ思フヨウニ言フコトモ書クコトモ出来マセン、ソコデ苦心惨憺シテツクツタノガ上ノ五言絶句デス、固ヨリ推敲尽クサズ幼稚拙劣ナモノデス。

私ハ戦前十年間中華大陸デ中日提携日華親善ノタメ走シ私ノ生涯デ一番快心光実シタ活動ヲ展開シマシタ、ソシテソノ間、読書三到シタ古今ノ中国語ノ本ハ約千冊位アリマシタガ敗戦後故郷ニ持チ帰ヘルコトガ出来タノハ僅カニ和綴ノ詩韻合璧只ノ五冊ダケデス、コレヲ拠リ処ニツクツタノガコノ絶句デ従ツテ平ソクダケハ合ツテ居リ微意モ亦猶存スルヨウデス。

玆ニ釧中第一回卒業生、加とろんと、米ごろんぴや、英おつくすふをど、三大学神学博士老熟錬達ノ八代斌助君ヲ初メ湖陵高校最若年卒業生、らてんノ旅、ら・まらげいにあデ売り出シタ新進気鋭ノ青年歌手、ぽうる梨木君ニ至ル八千五百名ノ同窓生諸君及ビ母校在校前途洋々タル千三百名ノ学生諸君ノ精神満腹元気健闘ヲ祈ツテ止ミマセン。

×　×



湖陵五十周年にあたつて

PTA会長　張江大策

わが湖陵高等学校は、大正二年の創立にかかり本年を以て、五十周年を迎えたわけであります。

かえりみるに、この学校の創立された五十年前と申しますと、二十世紀も初期に当り、世界史上まさに一大転換の行なわれようとする画期的な時代でありまして、そうした時代に、この学校が誕生したことは、まことに意義ぶかいものがあります。その後まさに半世紀にわたり、わが国運にも、一進一退があり、それに伴い、この学校の歴史にも、いろいろな経験があつた訳でありますが、本道においても由緒深い釧路中学校から、学制改革により湖陵高等学校に進展し前後八千八百名の春秋に富む有為の学徒を、社会に送り出して、日本文化の発展に貢献されたことに対して、深く敬意を表すると共に今日のめでたい記念式を迎えて、参列される多数の来賓、父兄、同窓生ならびに諸先生や、生徒の皆さんと共にまことに歓びにたえない次第であります。

湖陵五十年の伝統は、その困難窠苦に耐えつゝ培われて来たとも申せるのであります。

何も不便を凌ぐことのみが最上と申すのではありませんが、少なくともそれによつて強靭な根帯、即ち湖陵魂が培われて来たことは否めない事実であります。

学校も漸く完成の域に達したとはいえ、細部にわたつてはまだまだ不足の点があると思います。PTAとしても漸次その改善に御助力する所ではありますが、免じ角受けつがれた伝統を一層輝かしいものにするべく各個それぞれに現実な不断の努力を積まれるようにして下さい。自己を築くものは自己、伝統を培うものは生徒皆さんです。

どうぞこの五十周年を記念するに当り決意を新にして、健闘されるよう切望して、止みません。

祝　五十周年

後援会長　刀禰房吉

清明な釧路の秋を迎へ、大正二年釧路中学校として開校以来、幾多の風雪に堪え、輝かしい伝統を築き、玆に創立五十周年の記念式典を挙げられます事を心からお慶び申し上げます。この間本校の卒業生は既に八千八百名に達し、幾多の人材を育成された功績に対しまして、深く敬意を表するものであります。今静かに、この過ぎ去つた五十年を回顧致しますとき、此の間子弟の教育一途に尽瘁され、物故された諸先生、又は学業半ばにして大折された諸先輩に対し、心からの黙祷を捧げるものであります。この栄えある記念日に際しまして、どうか一時の行事に終らせず、これを機会に各々個性を生かし、基礎教育を充分身につけ、以て将来よき社会人となる礎いとなされますよう祈念致しまして、お祝いの言葉と致します。

五十周年記念に寄せて

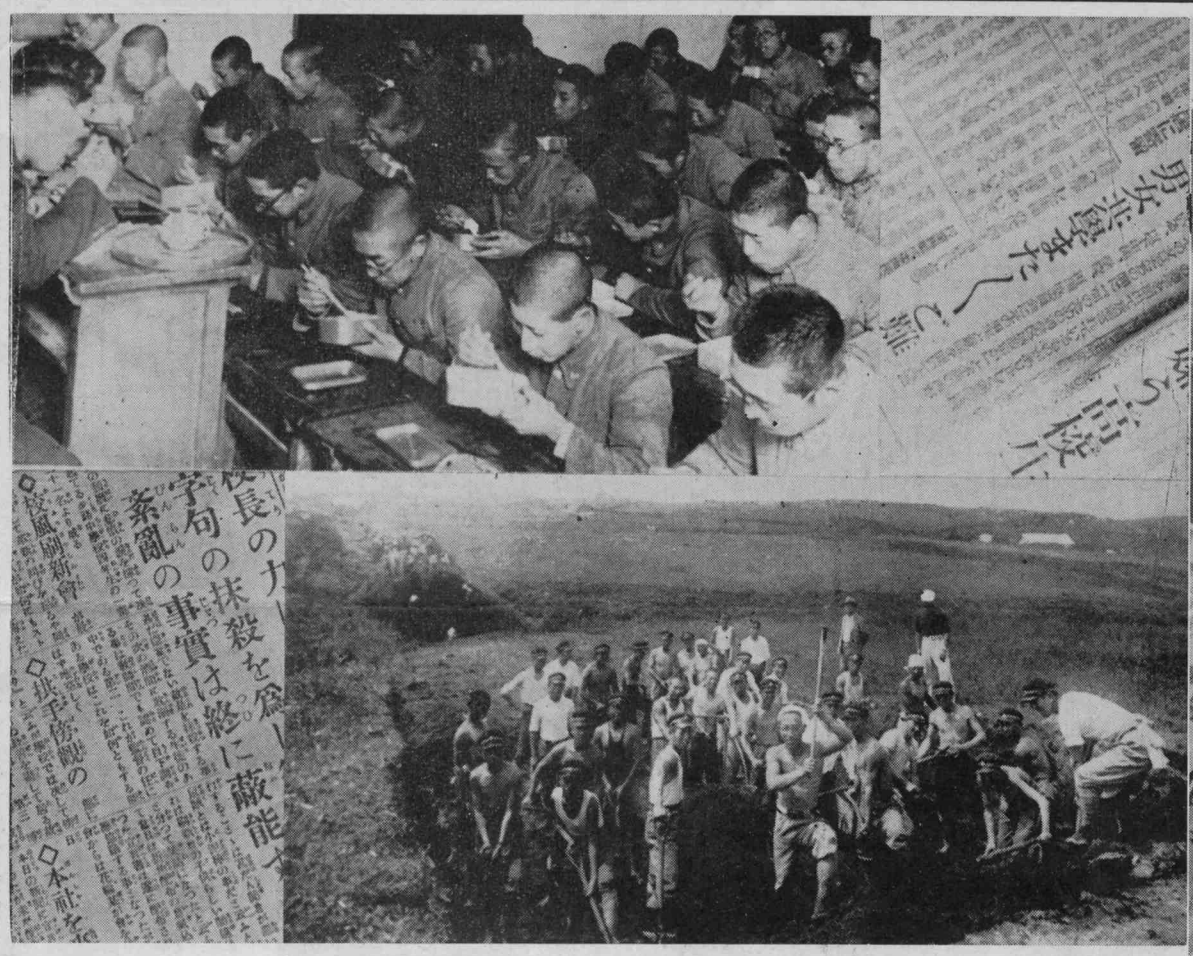
協賛会長　栗林定四郎

本校は大正二年に創立以来真に輝やかしい五十周年の記念式典を迎へました事は誠に慶祝にたえない次第で、在校生はもとより同窓生のみなさまと共に心から御祝詞を申し上げます。

わが母校の五十年の歩み因つて来たものをよく知り、よく顧みて基礎的な教育を身につけて、洋々たる前途に邁進する事が母校五十周年を迎へその式典に遇ふことが出来たみなさんの権利であり、義務でもありましよう。

輝やかしき五十周年の記念式典を迎へたのを機会に母校のみならず、凡ゆる分野に研さん怠りなく世界的視野にたつた信頼と尊敬とをかち得る人々になつて頂きたいと切望するものである。

よき先輩を乗り超えて行く生徒会のみなさんの健斗を祈つて御祝いの辞と致します。



（上）昼食の時間は今も昔もかわらないようですね。先生と生徒、お弁当、彼等の真面目な顔をよく見て下さい。
これは昭和14～5年頃の釧中生の食事風景です。

（下）土方仕事も板について。

昭和二十八年二月二十二日、校舎は一瞬にして、焼け落ちました。本校の蔵書は燃えている校舎の中に飛びこんで、必死に書物を運びだした生徒達の活躍によつて、そのほとんどが焼けずにすんだのです。
湖陵の歴史の暗い一ページでした。

寮生活の１スナップ……
昭和12年ごろです。
センタク、米とぎ、その他平和な未来の家庭が約束されるような湖陵健児です。

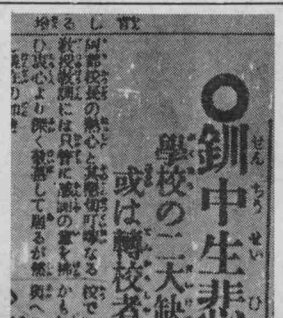
すぎし日の釧中のプロフイル

釧中には実に男くさいたくましい雰囲気がただよつていた。
それを生徒は大切にし、ひとつの伝統として、残していつた。
学問を好み、教員を増やしてほしい、今のままでは勉強出来ない、として行つた刷新事件などはそのあらわれである。
バンカラを良しとし、湖陵ケ丘をこよなく愛した先輩達……
以下、彼等の姿を思い出の写真集からぬき出してみた。

（上）寮　舎　去年グランドのはずれにあつたのをとりこわしました。　（下）演習風景。（指揮官の旗に注意）

当時の風俗がしのばれる演劇風景。（全部中学生です）

大正八年項第一回卒業生をやつと送りだしたばかりの釧路中学は新設の特に「さいはての地」の学校にはつきものの教員不足に悩んでいた。先生にしてもあまりいいものではないだろう。一人で何教科も受けもたなくてはならないのだから。しかしその影響が一番大きいのはもちろん生徒で、その学力の低化はむしろ当然といわねばならなかつた。又先生一人に対して生徒の数が多いから、なかなか生徒一人にまで目が届きかね、母校に見きりをつけ転校するものもでてきた。こんなわけで創立当時の意気込みは、風船玉みたいにしぼんでしまうかもさえ思われた。これを当時の新聞は「釧中生非憤の涙」と題しこう書いている。「第一回卒生をだしたばかりであるが、全道の中学校の中で釧路は札幌や函館その他の先輩の諸校に対して遥かに其声価が下で釧路と云えば入学が容易だ。卒業生の学力が乏しいとは世の定評となつてしまつて居る（中略）学校の改善がきし得れぬのなら進んで転校しなくてはならぬ（中略）教員の不足は学科の進程に多大なる支障を及ぼして居る」又授業がこういあ


○釧中生悲憤の涙
學校の二大缺點を悲む
或は轉校者も續出せむ

りさまだつたから、校内の風紀も相当みだれていたらしく「風紀紊乱」の文字が記事のあちこちにみうけられる。この様な空気にただなすことなく押し流されていくものが多かつたことは否定できないが、反面このくずれかかつた母校をたて直そうと日夜心をくだいている。生徒もいた。四年生二十一名で、結成された校風刷新会が起き上つたのである。彼等が学校側提出した陳情書の一部を紹介しよう。

「（前略）然ルニ近頃ニナリテモ風紀ト依然トシテ改善サレズ而モ或ハ朝礼ノナカリシ事アリ或ハ規定ニ従ハザル服装セラルル未ダ曾ヲ見ザル離ナリ、コレ吾等ノ到ラザルニ因ルトスルモ亦以テ之レガ監督ノ任アル学校ノ如何トモ為ス能バズシテ空シク拱手傍観ノ能ニアリシニ因ラズンバアラズ之レ真ノ愛校者トシ到底忍ブ能ハザルナリ、謙ヅテ学業方面ハト見レバ主要学科タル三角ナリ幾何ナク代数ナク化学ナク物理ナク国語ナク唯体操図画ノ如キ学科ソノ主ヲ占ヌ（中略）玄関久シク沈黙ヲ守リシ吾等同志ノ者二十名厳然トシテ立チ以上ノ二大欠陥即チ風紀紊乱授業不完全ニ向ツテ大刷新ヲ断行セントスル也」

この様にして釧中最初の事件「校風刷新事件」起きたのである。しかしその頃あちこちで見られた学校騒動とは少し事情が違つて、彼等は非常に隠当に事をはこんでいる。彼等はまず校長と相談をしている。当時の新聞を見るとその模様がよく分る。それによると校長は一部字句の不隠な点を直しただけで別にこれをにぎりつぶすようなことはしておらず、その処置を刷新会にまかせている。又校風の刷新という点では校長も大賛成で刷新会を一時的なものでなく永く校風の作興にあたりそのふんいきをもりあげる役目をしてほしいと述べられた程であつた。当時の新聞はこれを「既報の通り顧廃せる校風の刷新目的として起てる釧路中学校四年生の校風刷新会は往々学校騒動として伝えられるが加き不隠の行動には出ない、又是れに対し校長も相当刷新会の主張を入れて圧政的態度に出ないのみか、むしろ之が善導に務めたる結果今や刷新会は釧路中学校の中堅となり新たに健実なる校風を作興せんとして居る」と書いて居る

当校最初の事件としてもこの事に深く興味を覚える。しかし母校がくずれかけた時それをなおすべく生徒自身の手によつてつくられたのがこの校風刷新会である。彼等が学校へ与えた力は大きく満足とまではいかなくても学校内に、自分たちの手で母校をどうにかしなくてはという気持をうえつけた事はいうまでもない。

当時のまだ若い釧中の気風が、釧路魂が充分うかがわれよう。

たこれに二人づつ坐らされた時はぽーつとしてすつかり上気してしまつたが、正面には日の丸の大国旗が交叉し、其の下に教育勅語を三方に戴せて型の如く安置してあるのが目に映つた。気を落着けて視線を右側に向けて見たら古色蒼然たる「フロツクコート」に威儀を正した熱田校長先生が厳然と控へ、少し間を置いて阿部教頭先生西川先生、高橋先生、筒井先生、渋川先生が居並んで居た。続いて視線を左側に転じたところが、其処には一段上座に北海道長官（現在の知事に当る）の代理、少し離れた処に釧路支庁長、釧路町長及び町会議員、それに父兄が何れも皆「フロツクコート」や黒紋付の羽織、仙台平の袴を一着に及んでずらりと椅子につき、左右合計生徒の倍位の豪い人達が、僕等を睨む様にして並んで居るのだから、ぽーつとするのも無理のない次第であつた。」（〃湖陵〃第六号による）こうして北海道庁立釧路中学校は、北海道で第五番目の中学校として、湖陵ケ丘に誕生したのである。

創立

〃釧中受験者心得〃

昨報の如く、来る十五日より施行の釧路中学校入学試験受験者は、左記各項を心得べし。

△受験者は袴、若しくは洋服を着け、試験開始前に参集す可し。

△受験者は遅刻者は入場を許さず。

△受験者は下記物品の外携帯を許さず。白紙、罫紙、鉛筆、小筆、習字筆、小刀砥、墨。

△問題に対しては、一切説明を請ふを許さず。

△答案には必らず受験者の姓名、番地を記入す可し。

△答案は総て毛筆に

春採湖対岸より釧中校舎を眺む

て丁寧に認め、敬華に渉る時は綴り置く可し。

△且答案を差出したる上は、再びこを訂正する事を得ず。又、一旦退場したる時は、監督者の許可なくして時間中に入場する事を得ず。

△監督者の指揮命令に従はず。又、不正の行為ありと認むるものは、其受験を差止め且つ其答案を無効とす。（大正二年三月十三日付釧路新聞による）

こうして大正二年三月十五、十六日の両日、旧第一小学校（現在の日進小学校）において選抜試験が行なわれ、東北海道一円から集まつた百十三名の受験者の中から、五十名が入学を許可された。

入学式は、同年四月八日に現在の第一体育館で、初代熱田校長の教育勅語奉読に始まつた。入学生の一人であつた中川久平氏は、当時を回顧し、次のようにのべられている。「式場には机と椅子がくつついて居る。当時の僕等には全く目新しい、そして塗りたての真新しいのが五十個整然と並んで居

大正二年釧路中学として創立した湖陵が昭和二十八年二月二十二日、一瞬のうちに消えさつた。
その当時の様子を〃涙ぐましい生徒の活躍〃という見出しの新聞記事や、当時生徒であつた先輩の座談会から拾つてみよう。

湖陵秘話

湖陵は今年で五十周年を迎えた。この間、湖陵に学んだ生徒は八千余名を数え、体育館を仕切つた教室から現在の三階建ての立派な校舎になる迄にはいろいろな出来事があり、そのなかのあるものは忘れられ、あるものはとどめられ、現在に致つている。
以下、五十年に秘められたいくつかのエピソードを記してみよう。

「火災発生と同事に続々押しかけるとんど同校の生徒で、馳けつけた生徒は危険をものともせず紅蓮の焔に追われながらも階上、階下の器物、図書を投げ下し搬出するという涙ぐましい活やくを示し、〃さすがは学生〃と見る人の感激を誘いこれによつて校内図書は大半焼失を免れることができた。」

この火事によりほとんどの校舎が焼けてしまつたので、生徒収容対策が決められた。一月二十四日より三月一日まで第一学年、第二学年は学芸大学釧路分校の校舎二部使用、第三学年は三月二日まで登校しない。三月一日より三月三十一日まで残存校舎（四百四十四坪）の内部改造により十四教室設けて、第一学年、第二学年は二部授業。四月一日より五月三十一日まで新学期編成により第一学年、第三学年は残存校舎十四教室で単位修得の関係から一部授業、第二学年は東中学校舎八教室を借用して一部授業。六月一日より二十九年三月一日まで商業課程第一、二、三学年六学級は旭小学校仮校舎を借用。普通課程第一、三学年十二学級は残存校舎使用。第二学年六学級は東中学校校舎の一部六教室借用。当時在校生であつた先輩は当時を回想して語つている。

「H校に行つた時は、私がH出身だつたので特に不自由な感じはなく、又もとにもどつてきたんだという気やすさだけが記憶に残つている。」

又ある先輩は、「一年の時は運動場を仕切つた教室、二年の時はいそうろうしたということでだんだん苦痛にならされていつたかつこうだつたので、むこう（H校）にいつて特におれはいそうろうだという感じは全然もたなかつた。むこうに行つて苦痛だと思つたのは景色のよいことであつた。考えてみると学校のまわりの景色のよいということはあまりよくない。生徒は授業をさぼつてカツプルで湖の真中でボートをこぐんでなくただよわせているのをみせつけられて、授業が身に入らなくて非常に苦痛であつたことを記憶している。

昭和二十八年二月二十二日被災中の校舎

共学

昭和二十五年四月まで現在の江南高校が釧路高等女学校といつて女子の教育に当り、湖陵高校は釧路高等学校をなのる男子校であつた。それが文部省の指令により、共学制をひくためにこれらの学校を合併したのである。

「二目には湖陵高校では新入生にカリキユラム（教科課程）の指導と説明を終え目下全学年のホーム・ルーム（一ルーム五十人程度）の編成を行つている。ホーム・ルームの編成には高校（注、湖陵、江南―編集局）とも男女別のリストを作り、五十音順に区切つて男女の比率が平等に配置され男女間の親しさを増すように工夫が払われている。（中略）

教育方針が一変し、終戦により全て米国の教育方法を受け入れた文部省は、昭和二十五年四月男女共学制をひいた。

それまで「男女七才にして席を同じゆうせず」を通して来た国民に少なからず動揺があつたようである。

そういう中でわが湖陵高校も、釧高より湖陵に変るに際していろいろな問題があつたようである。

ここでもう一度その当時の模様を振り返つてみよう。

男女間の風紀については、先に共学を実施した江別高校の例もあり、両校とも自然生徒の間でエチケットが出来るものとしてさして憂慮しておらず、さらに男女間の風紀を厳格にするという方針は採らない意向である。」（後略）

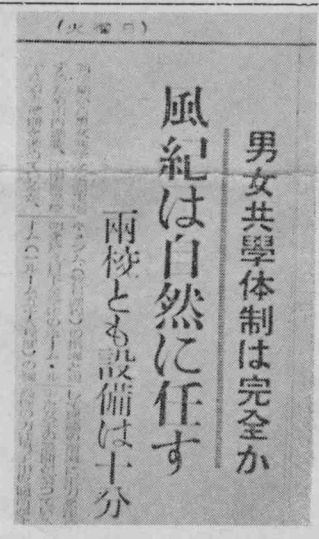
（二十五年四月四日道新より）

こうして着々と共学制が進められていつたが、そうしている間にも生徒や父兄の間での論議が紙上をにぎわしていた。

「道教委の失態による授業開始の遅延、一部PT会役員の全面共学反対とそれに刺激された通学区域変更希望者の増加など、いろいろな問題をはらみながらも釧路湖陵、江南両高校は十一日曲りなりにも男女共学のスタートを切つたが、それから一週間終つた現在依然として通学区域によつて転換された生徒間には、スツキリしたものがみえないようだ。（後略）」

（二十五年四十八日道新より）

又、通学区域制が実施されたことによつて、湖陵から江南へ移動した生徒の中にも不満の声は高かつた。四月十三日付の道新の投書欄には「共学を汚すもの」と題して次のように述べている。


男女共學体制は完全か
風紀は自然に任す
両校とも設備は十分

だれしも馴れた学舎を捨てて、他校へ移りたい者はいない。しかし僕等は過渡期の犠牲と覚悟して移つていつた。四月五日、○○高校へ行つてみて驚いた。男女の比率は、対三である。しかしこれが規定通りにこの結果となつたならば、我々はあえて異議は申し立てない。僕等の級友で受験組の者は

「男女共学の実施に当り公正なるべき学校当局、教師、学生に暗い行為のあつたことを見聞きし、青年としては正義感から黙つていられない。実情の一端をのべて識者の批判を仰ぎ、学校だけは敗戦後の混乱の中にも道義の行われるように、不快の徒輩の猛省を促したい。

当然○○校へ来なければならぬのに△△校に残つている。

明らかに○○校の通学区域内の野球の選手は全選そろつて△△校に残つている。

△△校の校長先生は「経済の理由か身体上の理由以外は、勝手にごまかした者は処分する」と堂々と明言された。「A君、B君に何の経済上の理由があるか。天下に公開出来る理由のない数十名のごまかしは、真理を究める殿堂である学校にとつて誠に不明朗である。」

（釧路市材木町　学生　山本武雄）

この投書により良心的な生徒が数名江南に移つただけであつた。

この共学制に移行するころの裏話を記しておこう。共学制が実施される前、釧高では毎日ホーム・ルームを開き、共学の賛否について議論した。しかし結論の出ないままに共学制が実施された。だがあくまで共学に反対した一部の生徒は「女と一緒に馬鹿らしくて勉強なんか出来るか。」と言つていつも授業をさぼつた。こうした人々によつて生れたのがラクビー部である。女学校から変つた江南は、全てが淑に行われるので釧高より移つた男生徒をまどつかせ、男子校から変つた湖陵は、荒つぽいので女生徒を驚かした。お互に異性の側で勉強するのは初めてなので自然逃避的になり、教室は真中の椅子には誰も座らず両方の隅にそれぞれ固まるという異常な雰囲気に包まれていた。先生達も初めての共学なので、かなり神経を尖らしていた。共学になつて目立つて変つたのは、男生徒が今までのバンカラスタイルからズボンはいつも折目正しく、髪はいつもきちんと刺られるようになつたことであつた。

こうして当初色々な問題をはらんだ共学制も、次第に馴れて現在に至つたのである。

行く教室がなかつた。又授業中も寒くてオーバーを着て長くつをはいたままでストーブがどこについているのかまつたくわからないほどさむい教室であつた。掃除は雪を入れてはくだけたつたから楽だつたけれど天井のない教室で学校全体がそうぞうしく屋内体育館がなかつたので遊ぶことも運動することもできなかつた。運動場を仕切つたベニヤ板一枚の天井のない教室で勉強したこと、雑巾や鉛筆のシンをつつんだ紙など色々なものがとんで来たのが記憶にある。それに冬の寒い時自習にさせてもらいたいのでとなりの教室にけむりを送つたりして、あまり勉強した記憶はなく、たいした苦労もなくけつこうのうのうとしてくらした。」このような生徒や先生達の苦労だけでなく一般市民の暖かい援助で湖陵も早急復興して今年で五十周年を迎える、暗いニュースのかげに秘められた心暖まる逸話を紹介しよう。「湖陵高校のお兄さんお姉さん達が可哀そうと、お母さんから戴つた小遣いを学校にあげて下さい。」と寄金した子供がある。（昭和二十八年一月二十三日の道新より）このような善意によつて今日の湖陵にたつたのである。

憶い出の記

余の生みの親〝釧中〟

八代斌助

(1) 先生たち…

明治の終りの年、北見、十勝、釧路、根室四ケ国に待望の最高学府（釧中）が与えられた。勇みに勇んで入学試験を受けたが、神の御護りの下に、合格の光栄に浴した。新しい靴を寝床に入れて、幾晩も眠られぬ程の感激をもつた。いよいよ始業式に行つてみると、屋内体操場が一つぽかんと立つているばかりだ。天井のない梁が見えている体操場を仕切つて、小さい教員室と事務室が出来ている。出席簿をつけるのに、先生が名前を呼んだら、梁の上から「ハイ」と返事をする奴もいた。先生は狸と云われた熱田校長、熊と云われた阿部副校長、あとは、人気のあつた西川、高橋両先生だ。安保という眼鏡をかけたニヤニヤした事務長がいた。狸校長は、肺病になつてずつと寝てしまわれたが、まだ健在の頃、一年生の十一月頃かストーブをなんぼしても焚いてくれない。めんどくさいので、木馬にして飛んでいたら、とうとう上の方がつぶれかかつた。そうしている中に、根室商業の校長が来てぐるぐると廻つて、その醜態（？）をみつけたものだ。翌朝の訓辞に校長が、「あまり恥かしくて、穴があつたら入りたかつた」とやつたので、狸が穴に入る事を連想して、ケラケラと笑つたら、とうとう親父が呼び出しを受けて、始末書をとられた。校長はいつも狐虎のチョツキを着て、金時計をぶら下げていた。阿部副校長は、学校の近くに家を建て、勤労奉仕の名人であつた。妻君は、みなりをかまわぬ、所謂、賢夫人で薪を割る位の事は平気であつた。教会にもお模に御飯を入れて、しよつてきたりして、仲々人気のあるおばさんであつた。阿部先生は熱田校長逝去のあと、後任校長となつたが、この先生から習つたのは、勤労奉仕という事で勤労奉仕は、晩年明石中学の名校長となつた山内校長が、宮津にいた時にはじめたのが早いか、我らの釧中の阿部校長が早いか、日本の教育史の一頁に論議をもたれる程の人であつた。手鼻をかむ事と堂々と立小便をする事に恐れをもたない精神とは、その時に養われたもので、今尚外国で立小便の快感を味い、勤労奉仕に手鼻をかんで、ポス的存在をなつかしんでいる。恩師阿部先生は、ちとつむじ曲りで、退職後は京都で生活され、時々妻君を困らしたものだ。それでも病床に見舞い、臨終から葬儀の事を自分がする事の出来たのは、光栄限りないものと思つている。西川先生は、生徒に人気のあつた素晴らしい人であつた。御大典の時に提灯行列のあと一杯飲んだ勢いで、安保ニヤニヤ居士の家のガラスを破つたとかいうので、とうとう辞めなければならなくなつた。若い世代の自分達が、そんな事丈で、よい先生を失うことのさびしさと、大人の世界の偽善者ぶりには、胸の痛む思いをしたものだ。もう一人高橋先生は、我らの偶像であつた。漢文の先生で、「朔の士二郎を祭るの文」などを講義される時は、全く予言者の風もしのばれ、深い感動をうけたものだ。とうとう釧路を去つて浦和に行かれ、晩年はキリスト教の信行に聖者の趣きを湛えていた。第二年、第三年となれば、武藤という素晴らしい先生が、天狗という素晴らしい先生が、天狗という素晴らしい先生など、これ又なつかしい宇野先生など、印象に残る方達がいられた。どうも釧中の先生たちは、綽名が動物園そのもので熊や狸、いたち、かばなど、様々な名前であつた。あとの先生のことは、後輩にゆずるとして、その頃の学生の生活を記してみよう。

(2) 生徒たちの交り…

釧中の特徴は、「パラダイス」の一言につきる。獅子と仔羊が同じ部屋であぐらをかくといつた様なものであつた。在校生中一番の金持が中川で、一番の貧乏が俺であつたが、貧富の差別によつて来る劣等感などは、お互い一つも抱いていなかつた。一年生の時に造つた靴や洋服は、三年にもなればズボンは下までとどかず、足には下駄を履いて、大事な所さえ覗かれるような格恰で登校したものだ服装検査となれば、みんなが「オイ八代、服装検査だ」と知らしてくれると、急いで煙突掃除の為の梯子（年中備つけられていた）を伝つて逃げ帰つたものだ。鶏を飼つて、卵を売ろうとすれば中川の家で市価より五厘高く買つてくれたものだ。その当時、四人の宗教家がいて、禿（坊主）、奥村（神主）、中村（易者）、とヤソの俺の四人が居たものだ。教派合同みたいなもので、お互いに親しく暮していた。市民の精神生活の為というて、路傍の講演をしたが、人集めの為に讃美歌を歌つて、禿坊主が説教したり、当時の思い出は尽きない。ただ最後に一言すれば、この釧中出身の同窓の友達が、ちつと故郷にとどまつて、自分達を育くんでくれた町の為、母校の為に尽されている事実を思い中川はじめ、多くの友人に心からの敬意を表し、世を逝りし恩師の霊の為に祈り、今育英の業をうけつぐ校長、職員、学生らの為に心より祝福を祈る。

（第一回卒業生）

寄宿舎生活の思い出

鉄野洋二

今夜も相変らずノミとシラミの襲撃で中々眠れそうにない。鍛えられた同室の先輩各位は安らかな寝息を立てている。突然上級生の「起床」の声に慌てて飛び起きる一年生、二年生は服を着るように命ぜられた。一年坊主の私は手早く服を着る。手早く着ないと後日の説教のネタになるので先を争う。上級生曰く「只今より仕事に出ていただきます。今夜の隊長は二年生のS君、金貨靴袋を持つて外に出よ。」私は学校より配給の靴袋を持つて、窓より外に出る。五月も中旬というのに、釧路の夜は冷い。仕事とは何であるかを隊長のSさんに尋ねた。燃料の補給であることを教えられる二年生が三名、一年生が四名の一隊は湖陵ケ丘を後に目的地へ向う。冬期間このような事が繰り返えされ部屋の床木に貯蔵された、芒では燃料不足という折寄宿舎が何時も赤々とストーブが快音を立てている謎も解けた。先輩曰く「創立以来二十数年を経る今日此のトウタン部隊は今だ一度も発見された事がない。この記録を君等も後輩に引継くよう期待する。」

大東亜戦争も終盤に近いころ、私たちは学徒動員で各地を点々とした。昭和二十年七月、西春別という一飛行場で空襲を受けた。釧路の北大通り一帯が焼け野原となつたとの情報に接したのもその時である。まもなく終戦となる。寄宿舎では先輩、後輩がそくそく動員より帰つて来た。そして皆健在であることを喜び合つた。その頃より食糧事情が悪化し、八十数名の寮生も一人二人と退舎し、下宿生活へと変つて行つた。新入生の入舎もほとんど無く、寮の経営に困難な面が現われたのもこの頃からである。先輩が斜里方面に買出しに出るが、澱粉粕がせいぜいである。寮の食事には閉口した。しかし私は退舎する事が落伍者のような気がして、最後まで頑張る事に決めた。私の同郷人で通称ハツチャンという同級生がいた。彼等のグループが度偉い事を提案したそれは校舎の縁の下に野良犬が集くつている。あの犬を捕えて肉鍋をしようではないかというのである。私も賛成し、犬狩隊に加つた調査の結果剣道場の縁の下に、常時五、六匹の親犬がいる事を知り先ず縁の下の風穴を塞ぎ一ケ所に針金で罠を仕掛けた。一度目は失敗したので二度目は、針金とロープで二重の罠にした。翌朝五時頃ギヤンギヤンという犬の悲鳴に、一同寮床より飛び起き、手に手に野球のバット或いは木刀等を持ち窓より飛び出して行く。寝巻姿の者、パンツ一枚の者など怪しげな奇声を発して駆ける情景はアパッチの襲撃さながらである。黒の大型犬が逃れようと心死に暴れ廻る先ず肩間にバットが振り下される続いて木刀の嵐、ギヤンギヤンと断末魔の悲鳴を上げながら、鼻や口から血を吹出しグタリとなる。死んだ犬になわをかけ、意気揚々と引揚げる。

幾らかの肉と称するものがドンブリに一ぱい？その夜の夜食はカレーライスと決定した。大きい雑巾バケツで米を煮る者、洗面器でカレーを作る者、テンヤワンヤである。寮生全員がスプーンやフオーク等を手に集まつてくる。

翌日誰かが犬の皮を町の商人に売つてきた。いくらで売つたのか記憶していないが、売つた銭でロシア人の店から闇タバコを買つて帰つて来た。空部屋になつている六号室の屋根裏が喫煙室である。その後も犬狩は続けられたが、毎朝犬を追廻す音が宿直の先生の咎めるところとなり中止された。今だにその犬の顔と、カレーライスの味は忘れられない。

昭和二十四年三月、私の卒業の年である。卒業試験も終り手持無沙汰の毎日が続いた。その頃食糧事情は益々悪化し私達の卒業と同時に寄宿者の廃止を学校当局より言い渡されたのである。

私の同級生で通称メスという物静かな人物がいた。メスと私は伝統ある寮の解散を嘆き悲しんだ。或る日、メスと私は寮生全員の集合を求め、寄宿の解散について討論を行なつた。立派な意見も出たが結論としては、食糧難或いは施設の補修等を考へ、今後の運営は困難であるので解散も止むを得ないだろうという面白くない事であつた。又卒業生を送る会と解散に伴う送別会を盛大に開こうではないかとの結論も出され、その経費の捻出方法が大きな問題となつたが寮が閉鎖されるのだから先輩の残してくれた備品を売つて、その経費にあてようという私とメスの案に全員賛成してくれた。翌日よりメスと私はひそかに備品を持ち出し、売り歩いたのである。しかし舎官長の追及に隠しきれず、売つた品を全部買いもどす羽目となつてしまつた。その時私は激しく舎官長と口論した。古い伝統ある寄宿舎が解散の止む無きに至つたのは、学校当局の管理不充分による経営困難が最大の原因である。先輩各位が寮の前途を祝い寄贈して下さつた備品の処理権限は在留寮生にあるという私のヘリクツも通らず寮生全員に謹慎が命ぜられ、メスと私は校長室で厳に判決を受けたのである。卒業式の前日登校するよう通知を受けたが、大吹雪のため列車不通となり夢みた卒業式に参加することが出来なかつた。列車開通と同時に登校、校長より訓示を受けた後、寮に帰つたガランとした部屋の机の上に卒業証書が一枚置かれてあつた。翌日、六年間住みなれた寄宿舎に別れを告げたのである。

（釧高第一回生）

感傷を無視して新しい歴史を

永田哲郎

私は釧高二期卒で、むくつけき野郎ばかりの時代はわれわれで終りを告げたわけです。

高二のときでしたか、男女共学の早期実現を推進するため、男女両校の与論調査をやり、東北海道新聞に発表したことがあります。ところが、私は女に全くヨワかつたので、女学校へはじめて赴き、名前は忘れましたが、生徒会の代表二、三名に会つて調査を依頼するのに、ポーと上気してろくすつぽ趣旨の説明もできず、「よろしくお願いします。」とか何とかいつてアタフタと帰つてきたのでした。当時はこれを〝純情〟といつたものですが、いまの生徒から見れば何ともバカげたことに思えるでしょう。

二年ほど前、数年ぶりで湖陵高校の前にたつたとき、私はあまりの変りように呆然となりました。われわれの学んだ校舎は焼失したとかでそこにはなく、位置さえ変つて、見知らぬ建物が建てられていました。そして校庭で嬉々としてハネまわつている男の生徒、女の生徒を……。

われわれの母校はすでになかつた！焼けてなくなつたのではない男女共学という新しい形式がこの学校でも採られたとき、釧中―釧高の伝統は消えたといつていいではないでしょうか。

伝統とは旧いものをそのまま遺すことではありませんが、男女共学という質的変化は伝統とは無関係に生じたものです。われわれのころの、粗野といいたいほどの男くささとたくましさは、もう〝母校〟から感ずることはできません。

私は男女共学がいいとか悪いとかいつているのではない。ただ学校全体のムードがわれわれのころとすつかり変つているのを淋しく思つたのです。しかしこれも東京の発展とともに武蔵野の面影が失なわれてゆくのを歎くに似た感傷かも知れません。私や私の先輩たちの感傷などにお構いなく、次々と新しい生徒達によつて湖陵高校の歴史が書き加えられていく……。

それでいいのでしょう。

私は男くささやたくましさを懐しみました。

私が入学したのは、昭和十九年。翌年は勤労動員で軍需工場へ駆り出され、現地で終戦を迎えたのですが、ここで二年上の上級生どもにずい分怒られました。私は軍隊の経験はもちろんありませんが、小説や映画で見、人の話に聞いた〝初年兵いじめ〟というのが丁度これと同じだつたろうと思います。ボクサーじゃあるまいし、顔が二倍に膨れ上がるほど殴つてたかつて叱られちやたまりません。上級生という権威によつて、ほんのちよつとした言動をとらえ、同じ国のために働いている自分達の弟みたいな下級生を制裁する――例え戦争のために日本人全体が狂気じみていたとしても、こんなことが許されていいはずはない。私の権威とか権力に対する憎悪と反抗はこのときに根ざしたものだと自分でも思つています。

私は男くささやたくましさを懐しみました。しかしこんな形の歪んだ行動は、別段男らしいわけでも、たくましいわけでもありません。一種の権威をふりかざした卑怯者、臆病者のやることです。私はこのようなバカげたことが、われわれの母校にこれから後、絶対に起こらないことを望みます。

男女共学によつてこういう荒々しさ、歪んだエネルギーの発散が中和され、男の生徒が真に騎士道的な男らしさを身につけるとすれば、私の感傷などは実にクダラないことになります。そして、それでこそ男女共学を目指して顔紅らめながら飛びまわつた。ささやかな私の先駆的活動も意義があつたと自己満足出来るのです。

（釧高二期卒）

沿革

明治四十五年八月
北海道庁立釧路中学校設置許可

大正二年三月
熱田真吉氏初代校長となる

大正二年四月
第一回入学式挙行（生徒数五十名）

大正二年十一月
開校式挙行

大正七年四月
阿部与作氏第二代校長となる

大正八年
生徒定員五百名（一学級増）

大正十一年四月
生徒定員七百五十名となる（一学級増）

大正十三年五月
四教室増築

昭和二年六月
平沢虎一氏第三代校長となる

昭和二年十月
校訓「誠愛友」を制定

昭和三年三月
平屋二教室増築

昭和三年四月
菅原覚也氏作詞により校歌制定

昭和三年六月
父兄会創立

昭和四年一月
柔道場父母会より寄附

昭和四年五月
渡辺繁吉氏第四代校長となる

昭和七年五月
佐藤修一氏第五代校長となる

昭和九年十二月
校長会より図書館寄附

昭和九年四月
工作教室増室（父兄会寄限）

昭和十一年八月
屋外運動場拡張

昭和十二年十二月
剣道場増築（父兄会寄附）

昭和十三年十一月
大沢作次氏第六代校長となる

昭和十五年四月
生徒定員千名（四学級）

昭和十六年三月
銃器室衛生室増築（父兄寄附）

昭和十七年四月
生徒定員千二百五十名、五学級

昭和十七年五月
岡部金夫氏第七代校長となる

昭和十九年三月
新校舎一階建竣工（父兄会寄附）

昭和十九年七月
大根田資夫氏第八代校長となる

昭和二十二年四月
道立釧路高等学校並びに併置中学校と改称、高等八学級併中学級

昭和二十二年七月
安達三夫氏第九代校長となる

昭和二十四年四月
生徒定員九百名

昭和二十五年四月
牧野包敏氏第十代校長となる

釧路湖陵高等学校と改称、通学区制に依る男女共学実施（生徒数九百八十五名）女子用便所新築二、普通教室四を調理室及び被服室に改造

図書室改造

木工室を理科生物及び準備室に改造

平屋三教室をろう学校に貸付け

三教室を南中に貸付け

昭和二十六年十一月
四教室増築竣工

昭和二十七年九月
創立四十周年記念式典挙行

昭和二十八年二月
校舎全燒

昭和二十九年八月
鉄筋三階建新校舎竣工

昭和三十年十月
牧野包敏校長苫小牧東高へ転任

住吉匡氏第十一代校長となる

昭和三十一年九月
屋内体育館増築工事完了

昭和三十四年四月
商業科廃止

昭和三十五年十月
住吉匡校長旭川西高へ移転任

中野一雄氏第十二代校長となる